
月に歌うは竜の娘

らいとてん

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

月に歌うは竜の娘

【Nコード】

N04910

【作者名】

らいとてん

【あらすじ】

竜族の娘ルナが世界の狭間「虚無」から落ちた先は、自分と同じ竜族が存在する異世界であった。火の竜族長ウェルトンは、彼女を竜族とは知らず拾う。これは、初めての育児に悪戦苦闘するウェルトンと実は精神年齢では彼より年上の養女の物語である。

月が満ちる前に、わたしを見つけて出して

暗い 暗い 穴の中を 何処までも落ちていく。
一体いつまで続くのか。
ふと、思ったのは。

—— ああ、約束を守れなかったな。

瞼の裏に浮かぶのは、一人の少女。
艶やかな黒髪を撫でれば、嬉しげに黒檀の瞳を細めた娘。
もう、二度と会えない。

ごめん。

心の中で謝った直後、彼女の意識は暗転した。

夜の闇に、少女の歌声が響く。

「月が満ちる前に、わたしを見つけて出して……」
歌を紡ぎながら、夜空に浮かぶ月に手を伸ばす。
自分と同じ名を持つ月に。

「ルナ」

低い声に名を呼ばれ、彼女は振り返った。

金色の髪を持つ男の燃えるような紅の瞳が
闇色の髪を持つ少女のただ静かな黒の瞳を捕らえた。
瞬間、彼女を炎が包む。

だが、その炎が彼女を傷つけることはなかった。

炎は、ただ、その冷えた身体を優しく暖めてくれた。

「今夜は冷える」

男は、バサツと乱暴にマントを少女に被せた。

「ありがとう」

礼を言う少女に男は溜息をついた。

「満月の度に、屋敷を抜け出すのはやめろ。メイド長が半狂乱にな
つてお前を捜していた……」

「ごめんなさい」

そういつて、目を伏せた彼女に、男は再び溜息をつくど、手を振り、魔術を發動させた。

彼らを優しく炎が囲む。

「これで寒くないだろう。ほら、続ける」

少女の歌が再び夜の森に流れ出す。

それは月夜のことだった。

火の竜族長が一人の少女を拾ったのは。

森の中、一糸まとわぬ姿で、氣を失っていた黒の娘。

彼女が持つのはただ、月と同じルナという名だけ。

何の氣まぐれか、彼はその娘を我が子とした。

彼は知らない、少女が『虚無』と言う穴に落ち、

この世界に舞い降りた、異世界の竜であることを。

その月のように神々しい本当の姿も。

少女は彼に教えない。

その本当の姿も眞実も。

それは、この穏やかな生活を失うことを意味するのだから。

たとえ、満月になるごとに、故郷をおもい胸が軋み

仲間をおもい

友人をおもい

家族をおもい

月に向かって歌わずにいられないとしても。

もはや、かえることのできぬ

月のように遠い世界をおもって今宵も彼女は歌う。

これは、そんな彼と彼女の物語。

天使のごとく、軽やかに

「反抗期だ……」

晚餐も終わり、料理長が部下と共に後片付けと明日の仕込みをしていた時のことだった。

険しい表情で厨房に入ってきた主人に、料理に何か至らない点があったかどうかと真剣に悩んだ料理長に火の竜族長はそう告げた。

静寂が厨房を支配した。

「はい？ あ、ウェルトン様？」

「ルナが反抗期なんだ。父親としてどうすべきだ？ ひたすら機嫌を取ればいいのだろうか。それともここはびしつと父としての威厳を見せるべきか？ いや、だが、そんなことをしてあの子に嫌われたらどうすれば……」

料理長は8人の子持ちだった。

とりあえず、なんとか主人を落ち着かせて話を聞くと、こういう事らしい。

晚餐の後、ルナの私室で主人のウェルトンは彼女にある贈り物をしたらしい。

それを見た瞬間、ルナは彼を部屋からたたき出し、がんとして入れてくれなくなったらしい。

「で、これがその贈り物ですか」

ぴかぴかに磨かれた調理台の上に置かれたそれは……深紅の下着だった。

上下お揃いのそれは、肌触りの良さそうな布が使われ、刺繍とレースの飾りも凝っており、かなり値の張る品と分かる。調理台に主人が無造作に置いたときは、衛生的にどうかと思ったが、よく考えれば、まだ未使用だからいいか、まあ、主人を片付けたら、念入りに洗浄し直そうという結論に達した。

部屋を追い出されてから、ここに来るまでずっと握りしめていたらしいそれは、微妙に皺が寄ってしまっている。もったいない。せっかくの高級品が。こんなところにまで素材を最大限利用し、机の足以外は全て極上の料理に仕上げる料理長としてのもったいない精神が出てきてしまう自分に、ああ、現実逃避以外のなにものでもないいなあと料理長は思った。主人は、まだ食い入るような目でその赤い物体を見ている。若手の料理人は真っ赤になっている。はっはっは。かわいいものだ。

ゴホンッ。

いいかげん空気に耐えきれなくなった、料理長は咳払いをした。そして、おそろおそろ、口を開いた。

「えー。ウェルトン様。なぜ、このような贈り物をしようと思われたのでしょうか」

それに、難しい表情のまま主人は答えた。

「コーナーにすすめられた」

ものすごく納得した料理長だった。

水の竜族であるコーナーはウェルトンの『独身』の親友だ。

都一の遊び人と名をはせる彼なら、なるほど、子育てにも詳しいだろう。他人の婚約者だろうと人妻だろうと500歳の年の差だろ

うと愛があればいいのだという彼ならば。星の数ほど浮き名を流した彼には、愛を選べないとのたまう彼には、噂だが、あくまで、噂だが、星にはちょっと足りない程度の数のパートナーがいるらしい。そんなコーナーの生き甲斐の一つは、この生真面目な主人をからかうことだ。そして、毎回それで迷惑を被るのは周囲だった。

「今、都の女の子達の間で流行っているんだよ。贈られれば、『天使のごとく、軽やかに』心が浮き立つというその品を是非、ルナ嬢に贈ってはどうか？」

そういつて、コーナーは主人を唆したらしい。

「ルナはこれの何が気に入らなかったのだろうか。色か？ 形か？ それとも素材だろうか？」

数があつて迷つたという主人に、思わず、彼がその都一流行っている下着屋で、仏頂面で婦人用下着を選んでいる光景が目には浮かんだ。

「いえ、そういう問題ではないかと」

震えそうな声を何とか保つたのは、いかなる時も冷静な料理長としてのプライドだった。そう、たとえ、爆笑寸前だったとしても。後に聞いた話だが、一緒に選びに行ったというコーナーは笑いすぎのあまり、命を落としたかたという。

「では、何が悪かったんだ？」

「それは……」

生真面目な主人に、年頃の娘心というものをいかに説明しようか悩む料理長に主人は更に問うた。

「と、いうか、これはどうやって使うのだ？」

沈黙が落ちた。深い深い沈黙が。
驚愕に固まる周囲に主人はなおも続ける。

「私はコーナーと違い遊び事に疎くてな。やはりこんな仕事一辺倒で、これの使い方も分からぬ父親など、ルナはいやなのだろうか。」
いや、問題はそこではない！　そこではないんです！　と、料理長は心の中で叫んだ。

「どうすればいいのだろうか、料理。」
それは、料理長の台詞だった。

初めて主人のお堅さを恨んだ料理長だった。

後日、顔を朱に染めてルナに謝り倒しているウェルトンの姿と主人の教育方針について真剣に討論する執事と料理長の姿が見られたという。

致命傷を負った笑顔、死まであと何歩

「『致命傷を負った笑顔、死まであと何歩』という詩をござんじかな、お嬢さん？」

いきなり私室に現れ、そうのたまった男に、ルナはどう反応すればよいのか分からなかった。

以前の彼女ならば、侵入者を迷うことなく切り捨て魔術で灰にしたのだが、虚無に落ちた衝撃で奥深く眠りについた魔力は未だ目覚めていない。

さて、どうすべきか。

男はコーナーと名乗った。

この屋敷の主人ウェルトンの友人らしい。

紺色の髪には一房の金髪が混じり、

澄んだ水色の瞳をキラキラと輝かせた、

優美な顔つきの男は、

困惑するルナのことなどお構いなしに喋り続けている。

「なるほど。可愛いね。君。あいつが致命傷を負うのも分かるよ。

ねえ、笑って見せてはもらえないかな？ 僕のために。僕にも見せて欲しいんだ。あいつを救った君の笑顔を」

そういつて、顎を片手で捕らえ、無理矢理上向けさせたルナの顔に彼の顔を近づけてきたコーナーに彼女の理性が切れる寸前、業火が男の手を包んだ。

「うわっ。熱っ。ひどいじゃないか・・・ウェルトン」

ルナをその背にかばったウェルトンは、友人を焼き殺さんばかりに睨み付た。

「此処で何をしているコーナー。」

「え、そりゃあ、僕の大親友である君がご執着という可愛らしい小鳥さんに挨拶を」

「どこから入った。お前だけは屋敷に入れるなど、きつく言い渡しているはずだが。」

険しい顔で詰問する友人に、コーナーは悪びれもせず、しれっといった。

「空から」

「は？」

眉間の皺を深めた友人にコーナーは再度丁寧に説明してやる。

「いや、先日から空中の水分を使って移動手段にできないか実験をしていただろう？今日も水のある程度固体化して王都の上を散歩していたら、君の屋敷を見つけてね。この機会に、君が後生大事にして誰にも見せていない可愛い君の娘の顔を是非とも拝見しておこうかと思つて。窓から」

そう。この男はルナが部屋で本を読んでいたら、いきなり窓から現れたのだ。

世の人は、それを『不法侵入』とよぶ。

「ほっ」

いつも仏頂面のウェルトンが珍しく笑った。
背筋の凍るような笑いだった。

「覚悟はできているのだろうか。屋敷の結界まで解除してくれて。
俺は王に謁見中だったのだぞ。それを屋敷で緊急事態が発生したよ
うだからとどつてみれば・・・」

徐々に室温が上がる。

ウェルトンの炎がただ一つの標的をあぶるためにゴウゴウと燃え
さかる。

「レア・ミディウム・ウェルダン。どれがいい？」

子供が見れば泣き出しそうな笑いを浮かべているウェルトンにコ
ーナーは余裕の表情で応じる。

「君の名に近いウェルダンにされるのも一通りの快楽を体験済みの
この身体にとってよい刺激になるかもしれないけれど、さすがにこ
の年になるときついものがあるかな。それに、今は、年相応の落ち
着きをもった竜族がお嬢さん方にもてる時代だからね。」

そういうと、ぱつと、窓の外に飛び出した。

足元に水で足場を作った水竜は、襲いかかる炎を巧みに避けつつ、
気障っぽく礼をした。

「可愛いお嬢さん。またね。」

そういつて、はた迷惑な男は去っていった。

後に残されたウェルトンは溜息をつく、膝をつき、ルナと目を
合わせて尋ねた。

「大丈夫か。なにかされなかつたか？」

それに少女がフルフルと首を振ると、ほっとしたように笑って彼女の髪を撫でる。

「安心しろ。二度とあの馬鹿はこの屋敷に入れぬ」

その馬鹿は、大昔に流行った詩を口ずさみつつ、優雅に空を散歩していた。

致命傷を負った笑顔、死まであと何歩　は
百年ほど前に流行った恋歌の一節だ。

それは男が友人とその恋人を祝福するために作った詩だった。
恋人を溺愛する友人をからかって作ったその詩に友人は心から幸せそうな顔でただ笑っていた。

だが、その友人は、そのただ一つの愛を失い
この百年間、仏頂面でひたすら仕事に打ち込んでいた。
あの手この手で友人をからかったが、まるで反応無し。
そんな、機械人形のごとく
能面のように変わらない表情で
ただ義務を果たすために毎日を生きていた友人に
表情を取り戻させた少女。

興味があつた。

実際会ってみれば、意志の強そうなその瞳はとても幼い子供のものとは思えなかった。あれは、将来いい女になるぞ。むらがる求婚者に娘を奪われまいと必死になる友人の姿を想像して彼はクククと笑った。

楽しくなりそうだ。

……に、しても。

「そうか、あいつはそういう趣味があったのか」

まあ、100年前にあんな事があったのだ。大人の女に絶望しても仕方があるまい。

道理でこれまで彼が紹介した数多の女性達にまるで興味を持たなかったはずだ。

作戦ミスだったか。

その後、鬼のような形相で彼を捕まえにきた友人に

5歳になる娘を紹介しようとして

『ウェルトン様を正しく導く会』の制裁を受けた愚か者がいるとかいないとか。

一つの少女、一人のそれ

肩に巻かれた包帯を見て、ルナは溜息をついた。

原因はやはり、というか、毎度のことながら、未熟者の父親だ。毎回はた迷惑な贈り物ばかりして下さる彼の贈り物は、とうとう危険物レベルになってしまった。

「それは何ですか？」

夕食後、私室で休んでいると、ウェルトンが大きな箱を持って入ってきた。内心今度は何だと思いつつそれでも一応礼儀としてルナは彼に尋ねた。先日の失敗を挽回しようとするこの新米パパは連日のように彼女に贈り物をしてくる。だが、そのどれもこれもが幼い子供に与えるようなものではなかった。

と、いうか、国王陛下ブロマイド集とか、薔薇に見せかけて実は魔虫植物な花束とかを貰ってどうしろというのだ。

女の子の喜びそうなものを選んでるのは分かるのだが、毎回どこかずれている贈り物にそれでも形ばかりは喜んでみせるけなげな娘は、箱をまじまじと見た。隙間から赤いリボンがはみ出ている。なんだか厭な予感がした。

「お前に贈り物だ。開けてみる」

ルナは恐る恐る箱の蓋に手をかけた。これで、中身が下着の山だったりしたら、どうしようと思いつながら。

「ぐるるる」

「え……？」

中に入っていたのは、真っ赤な下着の山ではなく、赤いリボンを首に巻いた魔獣だった。

つばらなお目々に、ぴんと立った耳、ふさふさの尻尾。うわぁ、可愛い……などと思っている余裕は、ない。ギラギラとこちらを睨んでくる瞳、周囲を警戒する耳、興奮に毛が逆立つ尾。思わず後ずさりしつつウェルトンに尋ねた。

「ええと、これは・・・？」

「ん？ 密猟されたらしい。まだ子供だからな。ある程度大きくしてから森に帰すつもりで、持ってきた。ほら、撫でてみる。可愛いだろう？」

笑顔で言うウェルトンに、ルナの顔が引きつる。火の竜族長相手に喧嘩を売る魔獣はいまい。本能的に自分より強い生き物には大人しく撫でられるだろう。だが、下等な竜族を食料にするほど凶暴な魔獣を魔力のないただの小娘が撫でられる訳がない。

大丈夫だから、と促すウェルトンに、箱の蓋を閉じて欲しいと言おうとしたときだった。魔獣がいきなり箱から飛び出し、グワツと口を開いて、凶暴な牙でルナの肩を捕らえた。

血相を変えたウェルトンが魔獣を灰にしようとした瞬間、

「待て」

ものすごく不機嫌な声が部屋に響いた。静止の厳命に思わず固まった一人と一匹に、声の持ち主は、はぁ、と溜息をついた。

「まず、」

びくつと一人と一匹の肩が揺れた。それを冷たい目で見やりつつルナは言う。

「どけ」

睨まれた魔獣は、慌てて少女の肩から口を離すと、ぶるぶると震えながら床にふせた。

「お父様」

ルナの肩から流れる血を見て、真っ青になったウェルトンに、少女はにっこりと笑って言う。

「メイド長を呼んできて下さい」

それからは大騒ぎだった。

止血だ！

ああ、メイド長が倒れた！

ウェルトン様。邪魔、あっち行って下さい！

包帯どこ！？

薬草もってこい！

魔獣って、狂犬病予防してるの！？

違う、それは例の魔虫植物だ！

屋敷中に怒号が飛び交った。

ルナの手当がされ、ウェルトンが強制的に『魔獣の危険性と女の子への贈り物講座』を受けさせられ、屋敷はようやく落ち着きを取り戻した。

ベッドの上に横たわり、ルナは深々と溜息をついた。そして、目の前の一人と一匹を見る。

真新しい絨毯の上で、

一人は肩を落とし、体育座りをして、こちらを見上げ、

一匹は耳をぺったんこにして、うつぶせになり、上目遣いにこちらを見ている。

「……ルナ。その……悪かった」

「ぐるる。」

ルナは、完全にシンクロしている一人と一匹に笑いを堪えるのに苦労した。わざとしかめっ面を作り、ぷいっとな横を向いてみせる。彼女の拒絶に、彼らが悲壮な声を上げる。だが、まだ許すわけにはいかないのだ。こんな贈り物を何度もされたり、魔獣に何度も噛まれるのはごめんだし、その度にこんな騒ぎを起こすのは屋敷の人間に申し訳ない。彼らには深く反省していただこう。

さて、どうにか愛娘のご機嫌を直してもらえた男は自室でふと呟いた。

「しかし、妙だな？」

なぜ、あの魔獣は彼女の命令に従ったのだろうか？

その答えを知る魔獣は、少女のベッドの下で、あの瞬間口の中に広がった味を思い出し、背中の毛を逆立てた。血を舐めて本能的に悟ったのだ。

その答えを。

火の竜族長ウェルトンの屋敷は

彼が愛娘のために厳選してきたとんでもないもので溢れかえって

いる。

その一つである、この賢明なる魔獣は、その答えを知っている。

一番とんでもないものを『一つ』選んでご覧と言われれば、
『それ』は『一人』の『少女』だと。

人の形をした一つの少女
人にあらざる一人のそれ

魔獣にとって絶対にして唯一の支配者

『月の竜族』

結局、ウェルトンが屋敷に持ち帰るものはとんでもないものばかりなのだということを新参者ながら一番理解する羽目になった魔獣だった。

星の海、咲きこぼれ

真っ黒な平面だった。

いや、それは黒ではない。

黒と見まがうほどの濃紺に塗りつぶされたキャンバス。

その闇の中

中央に浮かぶ

明るく輝く金色に染まった満月。

ルナがついてきていないことに気づき、ウェルトンは慌てて順路をもどった。

ここ、国立美術館には、絵画・彫刻・書・工芸など様々な分野の多様な作品が展示されている。

今日はルナを情操教育の一環として連れてきた。

彼自身は、芸術を嗜まない。

だが、昨日、詩人でもある友人が、子供の頃にそういうものに触れるのも大切なのだよと言い、珍しくコーナー様がまともなことを言っている、明日はつららでも降るんじゃないのか！？ いや、世紀末の大洪水が起きるに違いない！ 恐ろしい！ などと周囲が騒いでいたので、ふむ、どうやら今度は本当のことを言っているらしいと判断したのだ。

今日は、全く人気がない、というか、自分と少女しか来館者がいないため探しやすい。

なんでも、都で何か恐ろしいことが起こるといふ予言が昨日あったそうで、今日は家で大人しくしている人が多いらしいから、その

せいだろう。本当にあつたのならば、確実に彼の耳に入るはずなので、完全なガセだ。都を騒がせるとはけしからんと思うが、国立美術館がすいているのはありがたいのでよしとする。

ようやく少女を見つけたのは、有名な絵画『星の海、咲きこぼれ』の前だった。

くいいるように絵を見つめる少女の後ろには、忠実な番犬のごとく、魔獣が控えている。

その絵は、大昔、もはや竜族ですら言い伝えでしか知らないほどの過去に、描かれた作品であり、世界の失われた記憶に繋がると、考古学者達が賢明に解析している古代遺産でもある。

作者が不明なことや、『星の海、咲きこぼれて』という言い伝えられている題名と月一つしかないという絵の内容の不一致など、この作品は謎が多い。人々の関心も高く、名画と名高い。

さすが俺の娘。いいものに目をつけたなと、ウェルトンは頷き、ルナの肩をたたく。

「ルナ」

振り返った少女を腕の中に抱きかかえ、尋ねる。

「気に入ったのか？」

それに頷いた少女に、そうか、と微笑む。もう少し見ていたいから、先に行ってくださいと言う少女に、いや、お前の気が済むまでつきあうと言い、二人と一匹はかなり長い間、そのままだった。

その姿を柱の影から国立美術館長が震えながら見守っていた。

あの、あのウェルトン様が芸術鑑賞だなんて！

俺の後には灰しか残さぬ。芸術など畑の肥料にしてくれる、な火の竜族長様が。

当館が引き取りを希望していた屋敷の文化遺産を、こんなものの保存に使う金があったら、領民のために使う、と燃やそうとしながら言い放ったあの方が！

何とかコーナー様の取りなしで売却してもらえたらよかったものの。今でもあの時のことを思うと冷や汗が出る。

いや、あのときコーナー様からぼったくられた仲介料のことを思ってもだが。

とにかく、そんな最重要危険人物な、あのウェルトン様が来るなんて。

ああ、神よ！

今日は恐ろしいことが起こるというあの噂は本当だったのですね！

おい、お前達！

何をしている。今日は臨時休館だ！

非常態勢を取れ！

ウェルトン様は私が見張るから、お前達はあの方を刺激しないように、できるだけ離れていろ！

その言葉に従い、部下達は一目散に館外に避難した。

本当に忠誠心あふれる部下達だと、館長は涙した。

だから、それを見ることができたのは、彼と彼女と魔獣と館長だけだった。

突如として、歌が聞こえ始めた。

澄んだ愛らしい歌声が、荘厳な石造りの建物に響き渡る。

聞き慣れぬ言葉で紡がれる、慈愛に満ちたその歌が響く中、少女が見つめていた絵画に変化が起きた。

月が、輝き、浮かび上がり、絵画から抜け出したのだ。

まばゆい月が、次第に球体へと膨らんでゆく。

いや、それは月ではない。

それは……

黄金の固まりがほどけ、そこから現れたのは

膨大な数の文字の羅列であった。

その羅列もまた次第にほどけ

金に輝く文字が徐々に散らばってゆく。

まさに、星の海。咲きこぼれた星々が、少女の歌声に合わせて、ほどけ、散らばり、煌めきながら、少女の周囲に舞う。

再び、文字が羅列となり、球体となり、月となり、絵画にもどると同時に、

少女の歌も終わった。

後に残されたのは、

満足げな少女と

目を丸くした男と

腰を抜かした館長と

さすが私のご主人様！ と誇らしげな魔獣だった。

「今のはなんだ？」

ウェルトンが呆然と呟く。

「歌絵です。定められた歌に反応するよう細工され、魔術によって

描かれた絵画」

そうか、と呟き、ウェルトンはルナに笑いかけた。

「いいものを見させて貰った。ありがとう。ルナ。¥」

顔を赤くした少女に、よしよしとその頭を撫で、それから魔獣に命じる。

「館長を押さえる。」

ひいっと後ずさる館長の上に黒の魔獣がのし掛かり、ぐわっと口を開く。

魔獣の肩越しに、少女を下ろした男がこちらに向かってくるのが分かった。

ひたすら怯える館長に、ウェルトンは告げる。

「今、見たことを口外してみろ」

その瞳に映る業火の炎に館長は、必死に首を振る。

「い、いいません。だれにも。決して！」

やっぱり今日は厄日だった、と後に館長は疲れた顔で妻に語ったという。

屋敷に帰ったルナは、上機嫌なウェルトンに尋ねる。

「何も聞かないの？」

絵画の説明を見て、こちらの世界では、どうやらあの絵画を使う術は失われているらしいと分かっていたが、歌わずにはいられなかった。あの絵画を発動させるのに、魔力はいらない。ただ、心のこもった歌声だけが、あの絵画を目覚めさせられる。本来の姿が忘れ去られ、長く眠りについたままらしい絵画は、どこか寂しげで、思

わず歌ってしまったのだ。男に詰問されることを覚悟の上で。だが、男は何も尋ねてはこなかった。

「あの歌のことか？ 俺は芸術方面には疎いが、あれが素晴らしいものだということは分かったぞ。ありがとう、ルナ。お前は俺の傲慢の娘だ」

そういつて、ルナの質問の意味が分かっているのかいないのか、ただ笑う男に、だから、こういう男だから自分は歌ってみせたくなかったのだと再確認して、少女も微笑んだ。

不眠症の翼、目覚めぬ鳥

木漏れ日の中で魔獣と寄り添って眠る黒の少女。

穏やかで微笑ましい光景だった。

ふと、魔獣が顔を上げ耳をそばだてた。

人差し指を唇に当てて、少女を起こすなと合図する。

そして、そっと毛布を掛けようとしたメイド長は偶然その寝言を聞いた。

「レフイー……」

これが、ことの発端であった。

「ルナを聖夜祭に？」

「はい」

怪訝な顔をした火の竜族長にメイド長が頷く。

「どうしたんだ、いきなり」

「小さい子供はああいうお祭りが好きなものです」

そう言われて、ふむ、とウェルトンは頷いた。確かに一理ある。
「善処しよう」

聖夜祭の日は朝から大騒ぎだった。

ルナ様の黒髪には純白のリボンがいかしら？

ウェルトン様に合わせて深紅というのはどう？

間違っても水色を使っては駄目よ？ 色魔のコーナー様がよってくるわ。

本番は夜だというのに、メイド達に寄ってたかつて髪を結われ、着飾らされたルナは、何故か、今、国王陛下に謁見している。

「君がウェルトンの可愛い小鳥か」

なんだかこっちに来てからやたら小鳥呼ばわりされるな、とルナは思った。

国王陛下のご尊顔は、以前ウェルトンがくれたブロマイド集そのままだ。修正写真ではなかったらしい。珍しく彼の贈り物が役立った瞬間だった。できれば、役立って欲しくなかったが。

ウェルトンが教師をつけてくれているので、大体この世界の礼儀作法も分かるようになってきたとはいえ、いきなり国王陛下とは、実地訓練にしてもちよっと、いや、かなり上級編になる。いつてみれば、いきなりボスキャラが出てきた感じだ。

ブロマイド集の国王様プロフィールを思い出してみる。好物は王妃殿下特製スープ……役に立ちそうにない。とりあえず、付け焼き刃の挨拶を試してみる。

「お目にかかれまして、光栄でございます。国王陛下。ルナと申します」

さて、ここから美辞麗句を並べ立てて、この方のご機嫌をよろしくして、あわよくば可及的速やかにこの場から逃げ去りたいものだ。

「陛下！」

救世主ウェルトンが、かなり慌てた様子でこちらに来た。

これで逃げられる、と胸を撫で下ろしたルナの耳に、国王陛下の思いがけない台詞が聞こえた。

「おお、ウェルトン、ちょうどいいところに。今、君の娘を今年の『水鏡の乙女』に任命しようと思っていたところなんだ。あれは、

月の神に捧げるものでもあるのだろうか？ 月の神祝詞でもある『ルナ』は、正に適任だろう」

その言葉に、周りの人間がどよめく。

『水鏡の乙女』という聞き慣れない言葉にルナは首をかしげた。

『水』。……義理とはいえ、火の竜族長の娘に頼んでいいのか？ と、いうか、周りの反応から、かなり重要な役目だと分かる。こんなにほいっと、任せていいものではないのでは。

「国王陛下。今年の『水鏡の乙女』は緑の竜族長の次女殿に決まっております。」

案の定、白ひげの宰相らしき人が国王陛下を諫めている。

「別にいいじゃないか。これから、何千回と機会があるんだし。それに、」

そう言つて、こちらを見る金の瞳に、昔の知り合いを思い出した。面白いこと大好きで、周りを振り回すことが大好きなかつての上司。

「ルナ殿にさせた方が面白そうだ」

その言い草に、宰相が頭を抱える。ルナも、頭痛がしてきた。ああ、この宰相殿、苦労しているんだろうなあと心から同情した。

今度は女官に囲まれた。

屋敷でしてもらった髪も服も装飾具も『水鏡の乙女』にふさわしくないそうだ。まあ、火の竜族長の娘の格好は、確かにそれからもつとも縁遠いものに違いない。

なんて可愛らしいのかしら。

ウェルトン様が夢中になるのも無理ないわ。

まるでお人形さんみたいね。

キヤアキヤア言いながら自分を着せ替え人形にしている女官達の話から推測するに、今回、自分はいいいダシにされたいらしい。水の竜族が指揮を執る神事に、火の竜族の縁者が参加することは、大変意味あることだそうだと。

相対する力同士の竜族が敵対するのはまああることだ。

だが、今の水の竜族長（コーナーの孫らしい）と火の竜族長の不仲っぷりは異常らしい。

それも無理からぬ程度の『事件』がかつてあったそうだが、それを教えてくれる者はいなかった。曰く「お子様にはまだ早いわよ、おませさん」だそうだと。

歩けば、手首につけた銀鎖がシャラリと鳴る。白い衣の裾を翻しながら、ルナは王宮の奥へと向かった。

『水鏡の乙女』は月に祈りを捧げる神事だそうだと。四大竜族と王の前で、王宮の中にある神聖な湖で祈りを捧げる儀式。本来ならば選ばれし乙女が月の神に捧げる歌と舞を披露するそうだと、さすがにそれは無理だろうということだ、今回は代役を立ててくれるらしい。予行演習を見れば、竜族の古代語である聖祝詞を使っており、確かに、『素人』が一朝一夕でできるものではなかった。ルナは、代理人と神官が神事を行っている間、ただ湖に祈りを捧げていればいいと言われた。

正直言って、

国王陛下の意図も、

ウェルトンと水の竜族長の断絶も、

うちの孫がごめんねーというコーナーも、

——どうでもよかった。

自分は、ただウェルトンの可愛い娘でいられれば、それでよかった。穏やかで心地よい生活。眠る間さえ惜しんで執務をこなしたかつてのルナからは想像もできないほど穏やかな日々。魔力がいまだ目覚めぬルナは、例えつかの間の夢であったとしても、安らかな微睡みを愉しむこの生活を愛していた。

だが、ルナが着替え中に止める女官の制止の声にも耳を貸さず、部屋に入ってきて、上から下まで彼女を見分した後、フンツと馬鹿にしたような笑みを浮かべ、このような小娘に『月の加護』が得られるとは思えぬな、とあざ笑った、あの男は許せない。こんな小娘にうつつを抜かすとは、ウェルトンもおちたもの、と下卑た笑いを浮かべた、あの男だけは。

目にももの見せてやろう。

喧嘩早いところだけは養父に似て……というメイド長の溜息が聞こえた気がした。

夜風が草花を揺らし、水面に映る満月を揺らす。
満月を映しとった湖の前で、踊る人影があつた。

満天の星空の中、ひときわ明るく輝く月に照らされ一人少女が舞う。

楽の音はなく、ただ、シャラリシャラリと銀鎖が鳴り響く。
それにあわせ、少女は、歌い、踊る。

翻る白の衣

月光に輝く黒髪

蝶のように舞う白い手足

夜空に響く聖なる歌声

それは、まさに、夜の支配者。

息を飲む竜族達の前で、月の化身は最後の一節を終え、湖に入っていた。

体の半分ほどが水に沈んだ瞬間、突如、湖が淡く光り出した。

少女の前で、水が盛り上がり、何かを形作ってゆく。

透明なそれは、一人の若い娘に見えた。

その顔立ちがはつきりした瞬間、ルナはたまらず叫んだ。

「レフィー！」

不眠症の翼を持つ月が

今はまだ目覚めぬ鳥が

かつて『共にあるもの』とした小鳥。

水の乙女は微笑んで、そっとルナの額に口づけた。

水が再び形を無くし、湖がもとの静けさを取り戻しても、少女は水の中に立ちつくしていた。女官が言っていた。『月の加護』とは、月が『水鏡の乙女』に与える褒美であると。その乙女が最も愛する人物の姿を水鏡に映して見せてくれるのだと。もしかしたら、見られるかもしれないとは思っていた。あの娘の顔を。だが、まるで生きて目の前にいるかのような、あの姿。まさか、あれほどのものは。

思っていた以上の褒美に呆然とする少女は知らない。己が本当に奇跡を起こしたことを。『月の加護』は稀なるもの。そのほとんどは水の竜族長が魔力で起こしてきたまがいものであった。たまに本物があつたとしても、水が姿を形作り、その上、動くことなど、めったにない。

「『レフィー』か。まさに『ルナ』がよぶにふさわしい」

王の呟きに、ほうけていた火の竜族長が慌てて娘を湖から引き出し、火で包み込む。一応、神水なんだから、丁重に扱いたまえ、というコーナーに、うるさい、娘が風邪を引いたら大変だろうが、とウェルトンがいう。いつも通り口喧嘩を始める二人に、周囲がようやく動き出す。そんな中、悔しげにウェルトンとその娘を睨み付ける水の竜族長。面白いことになりそうだと、にんまり笑った国王陛下に、宰相は重い溜息をついた。

屋敷に帰れば、メイド長が寝ずの番をしてくれていた。

「もう、よい子が寝る時間をとくに過ぎております。さあ、さあ、お疲れでしょう？ どうぞ今夜はぐっすりお休み下さい。明日はお寝坊しても構いませんよ」

すやすやと眠る少女の寝顔にメイド長は微笑んだ。さて、我らが主人の愛し子は、『その人』にあえたのであろうか？ そうであってほしい。そう、数百年前の『水鏡の乙女』は、その時、水面に映った恋人であり、今は夫である人の待つ家への帰り道、月に祈った。

『レフィーリア』

それは、神話に登場する、月に住まう小鳥の名だ。

孤独な月にそっと寄り添う小鳥。

信心深い竜族ならば誰もが知っている。

今では神官しか使わない古代語における、その意味は『共にあるもの』。

青ざめた月光、嘲笑う子どもたち（完）

夜の闇に、少女の歌声が響く。

『それ』は月夜の子守歌。

「月が満ちる前に、わたしを見つけ出して」

流行りの店でキャッチコピーに使われるほど親しまれた歌。

「天使のごとく、軽やかに」

時に詩人は引用し、貴人が教養として学ぶ古歌。

「致命傷を負った笑顔、死まであと何歩」

人里離れた森に住まう魔獣すら耳にするほど有名な歌。

「一つの少女、一人のそれ」

古代遺産にその一節が記されるほど昔からある歌。

「星の海、咲きこぼれ」

古代語である神祝詞の歌。

「不眠症の翼、目覚めぬ鳥」

『それ』は満月に捧げる聖歌。

「青ざめた月光、嘲笑う子どもたち」

夜の闇に、少女の歌声が響く。

舞う少女の軌跡は淡く光を放っていた。
浮かび上がる複雑な文様。

その中心で踊る少女。

徐々に文様は崩れ、金の粒子となる。
粒子が少女の中に吸い込まれていく。
その一つをそつと手の内に包み込む。

最後の一節が終わり、そつと手を開いても、そこには何もない。
暗い森の中、ルナはふつと笑い、そのまま、自分の幼い手を見つめ続けた。

どこか、あちらの世界に似て、やはり違う、こちらの世界。
優しい人々、穏やかな生活、日だまりで微睡むような日々。
だが。

ルナは、幼い手をぐつと握りしめ、俯く。

いつまでも今のままではいられない。

あちらの世界で、彼女は竜族として成人していた。

今は、『虚無』に落ちたためか、魔力を失い幼少期の姿に戻っている。魔力の回復に伴い、少女から大人へと成長しているが、成人体となれば加齢は止まる。そうなれば、もう、あの屋敷にはいられない。魔力を持たぬ黒の少女が、老いぬのはおかしいから。自分が本来の姿にもどるときには、魔力も戻っている。その時、自分は……。

「ルナ様」

背後に控えていた魔獣が、森への侵入者を告げる。
恐らく、彼だ。

「ありがとう」

ルナは満月を見上げ、再び歌い始める。

「月が満ちる前に、わたしを見つけ出して……」

歌を紡ぎながら、夜空に浮かぶ月に幼い手を伸ばす。

自分と同じ名を持つ月に。

「ルナ」

低い声に名を呼ばれた。いつものように、炎が彼女をつつみ、暖める。ウェルトンは、溜息をつき、小柄な少女をマントで包み、抱き上げた。

「満月の度に、お前を捜して来いとメイド長達に屋敷からたたき出されるのには、もう飽きた。だから、屋敷から抜け出すときは、俺に声を掛ける。どこでも、お前の行きたいところに一緒に行つてやる。それなら屋敷の者達もまだ安心だろうからな」

「ごめんなさい。」

そういつて、目を伏せたルナに、ウェルトンは再び溜息をつくとき、手を振り、魔術を発動させた。彼らを優しく炎が囲む。

「ほら、続ける」

少女の歌が再び夜の森に流れ出す。

娘の歌に耳を傾けるウェルトンは、まだ知らない。

『それ』は、

こちらの世界では、月夜の子守歌だが

あちらの世界では、満月に捧げる聖歌であると。

『それ』は

満月の力を借り、魔力を回復するための儀式に使われる聖歌。

少女は満月の度に聖歌を歌う。

自分は、何のために歌うのだろうか、と月に尋ねながら。

魔力が戻っても、あちらの世界に帰れる保証はない。では、自分はどすればよいのだろうか。

天上の月は遠く、掴めそうで掴めない。
まるで彼女の問いの答えのように。

闇夜のように先の分からぬ運命の中
月はただ見守っている。

そんな彼女と彼の物語を。

青ざめた月光、嘲笑う子どもたち（完）（後書き）

ここまで読んでいただき、ありがとうございました。
ウェルトンとルナの物語『少女編』は、これで完結です。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0491o/>

月に歌うは竜の娘

2010年10月9日08時52分発行